



第23号

編集発行／碧南市

哲学たいけん村

無我苑

所在地／碧南市坂口町3-100

〒447-0087 : TEL. 0566-41-8522

: FAX. 0566-41-7761



Kirisima 02-7A 55×80cm

森岡完介 もりおか かんすけ

- 1941 名古屋市昭和区に生まれる
- 1964 愛知学芸大学（現教育大学）美術科卒業
- 1983 愛知県芸術選奨文化賞受賞

個展

- 1965 桜画廊（名古屋）
- 以降 ギャラリーユマニテ（名古屋）
- シロタ画廊（東京・銀座）
- ギャラリーAPA（名古屋）
- J・ダラビィーギャラリー（ロサンゼルス）
- タイ国立美術館（バンコク）
- 国際藝苑美術館（北京）
- など国内外100回を超える個展を開催

瞑想回廊第二十四回企画展示
 『海から天・地そして心の古里へ』 森岡完介版画展

平成十七年七月十二日(火)～九月十一日(日)

伊藤証信の遺品

「漱石門下の寄せ書き」

哲学たいけん村無我苑において伊藤証信の遺品展を行うとき、必ず展示されると言って過言ではないのが、この「漱石門下の寄せ書き」である。夏目漱石の門下生を中心に明治から大正、昭和期にかけて活躍した著名人、十七名の寄せ書きがされている。



津田清楓	徳田秋江	中村古峽	植竹喜四郎	小宮能成
岩野泡鳴	安部豊隆	鈴木三重吉	岡田耕三	堺利彦
万造寺齊	伊藤証信	沼波瓊音	和辻哲郎	阿部次郎
生田長江	森田草平			

この寄せ書きは、いつ、どこで、どのようにして書かれたものなのであろうか。このことを明らかにするために二冊の本を紹介したい。

まず、原武哲著『喪章を着けた千円札の漱石・伝記と考証』（笠間書院 二〇〇三年）によると

「一体、夏目漱石は伊藤証信と直接交渉があったのだろうか。今回の書簡発見まで伊藤証信の名は、日記・書簡・断片を含めた漱石全作品の中に一度も登場したことのない人物だった。おそらく一度も会ったことのない人物であったであろう。しかし、森田草平の徳憑であろうか、阿

部次郎・和辻哲郎・小宮豊隆・安倍能成・野上白川らの漱石門下生が『反響』に執筆し、同人であった伊藤証信という「無我愛」運動家で宗教家と何らかの交流があったと推測される。そして、木曜会の席上で、森田・阿部・和辻・小宮・安倍・野上らの口から、伊藤の「無我愛」が話題にならなかつたとは言えない。」

また、雑誌『反響』創刊号（反響社 一九一四年）の森田草平の「消息」によれば、

「いよいよ『反響』が生れることに成つて、其披露旁晚餐を共にしたいと云ふので、初號に書いて貰へさうな方々へ、生田君と小生との名で招待状を發した。三月十四日の夜、神田橋外の三河屋へ、折柄の細雨にも係らず、お約束下すつた方々は、漱石先生を除いて、一人も残らず御集り下すつたのは、小生どもの衷心より感謝する次第で有る。左に今列記すれば、

津田清楓	徳田秋江	中村古峽
植竹喜四郎	小宮能成	岩野泡鳴
安部豊隆	鈴木三重吉	岡田耕三
堺枯川	萬造寺齊	伊藤証信
沼波瓊音	和辻哲郎	阿部次郎
の諸君、これに加ふるに、		
生田長江	森田草平（以下略）	

これらのことから推測するに漱石と証信に直接的な交流関係はなく、証信は漱石門下の諸氏との交流が多く、『反響』

創刊前の披露晚餐会で一同が会していること、その日の天候だと思われる細雨、雲霧からも、この寄せ書きは大正三年三月十四日、この会において書かれたと考えて良いだろう。

なお、『反響』文中の披露晚餐会の出席者小宮能成、安倍豊隆とあるのは小宮豊隆、安倍能成の間違いであると思われる。

以下寄せ書きに名を連ねた方々の一部を紹介します。

阿部次郎 あべじろう
一八八三～一九五九

大正・昭和期の哲学者・美学者。夏目漱石の門下。大正三年「三太郎の日記」を発表し、大正六年雑誌「思潮」を主宰。大正一二年東北帝大教授となり、帝国学士院会員。「倫理学の根本問題」のほか哲学書も多く、「ファウスト」等の翻訳者としても知られる。

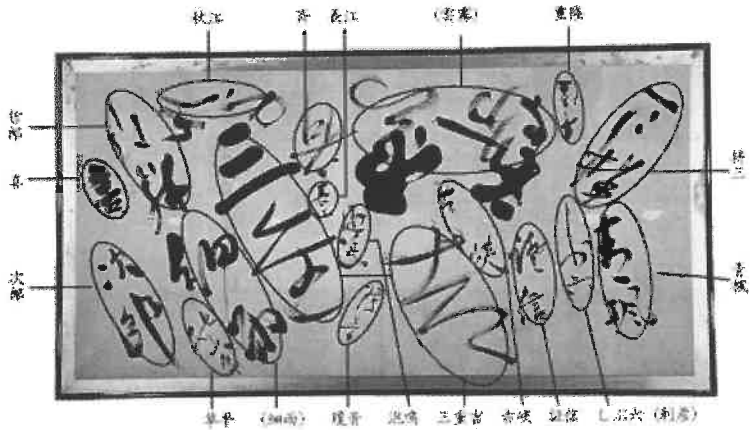
安倍能成 あべよししげ
一八八三～一九六六

大正・昭和期の教育者・哲学者。夏目漱石の門下。哲学書の翻訳や、「西洋古代中世哲学史」、「西洋近世哲学史」などを著わす。昭和一五年一高校長となる。昭和二一年幣原内閣の文相となり、ついで帝室博物館総長。学習院長となり、没時まで私立としての学習院の経営に貢献した。

小宮豊隆 こみやとよたか

一八八四〜一九六六

大正・昭和期の文芸評論家・ドイツ文学者。夏目漱石門下で「烙印」などの小説もあるが、文学・演劇評論家として知られ、特に漱石研究は著名。また、芭蕉研究家、ドイツ文学翻訳紹介・研究家としても著名。東北帝大教授を経て学習院大教授を務めた。



岩野泡鳴 いわのほうめい

一八七三〜一九二〇

明治・大正時代の小説家・評論家・詩人。明治三四年以降、詩集「露じも」、「夕潮」、「悲恋悲歌」を発表。霊肉の葛藤・苦悶を苦心の詩型にうたい込み、独自の詩風で注目される。明治四十一年「闇の盃盤」以後は小説に転じた。同年、評論「新自然主義」を、翌年小説「耽溺」を発表。また、さまざまな事業に手を出

して失敗したり、女性関係の乱れから世間の批判を受けるなど波乱に富む人生を送りながら、詩作・詩論・翻訳・劇作、そして一元描写の小説執筆と旺盛な活動ぶりを示した。

鈴木三重吉 すずきみえきち

一八八二〜一九三六

明治・大正・昭和期の小説家。夏目漱石に師事、その推挙をうけて明治三十九年小説「千鳥」を発表。中学教師を務める傍ら、数々の作品を執筆して小説家としての評価を上げる一方で、娘のために作品を創作したことをきっかけに児童文学作品を手掛けるようになった。大正七年、児童文芸誌「赤い鳥」を創刊し、芸術性ゆたかな童話・童謡の創作を提唱。坪田譲治、新美南吉らの童話作家を育てた。

近松秋江 ちかまつしゅうこう

一八七六〜一九四四

明治・大正期の小説家。「読売新聞」に匿名にて文芸評論「文壇無駄話」を連載。後に自己の身辺に取材した「別れたる妻に送る手紙」を発表。「疑惑」「黒髪」「子の愛の為に」などを発表し、とくにその露骨な愛欲生活の描写によって、代表的な私小説作家の一人とされる。本名は徳田であるが、近松門左衛門を慕うあまり改姓した。

堺利彦 さかいとしひこ

一八七〇〜一九三三

明治・大正・昭和期の社会主義者。号は枯川。明治三二年「万朝報」社に入る。日露戦争が切迫すると、紙面上で日露非戦論を展開。明治三六年幸徳秋水らと平民社を創立、週刊「平民新聞」を創刊した。大正九年日本社会主義同盟を組織し、大正十一年には日本共産党創立に参加。その後、無産大衆党や全国労働大衆党などに属し、反戦活動にたずさわった。

和辻哲郎 わつじてつろう

一八八九〜一九六〇

大正・昭和期の哲学者・倫理学者。東京帝大在学中に谷崎潤一郎らと第二次「新思潮」の同人となる。卒業の翌年の大正二年はじめて夏目漱石に会う。「ニイチエ研究」を発表するなど、はじめは西洋哲学を研究していたが、しだいに日本の古美術や古代文化への関心が高まり、大正八年「古寺巡礼」、翌年「日本古代文化」を相次いで発表する。単発の論文集「日本精神史研究」を正統二巻出すなど、日本研究が続いていたが、大正一四年京都帝大の倫理学を担当したのを機に、仏教倫理思想史、西洋の倫理学等の研究をはじめめる。昭和一二年以降「倫理学」全三巻を発表する。戦後、日本倫理学会会長となり、昭和三〇年文化勲章を受章した。

沼敬瓊音 ぬなみけいおん

一八七七〜一九二七

明治・大正期の国文学者・俳人。明治四四年から「俳味」を主宰し、古俳書・古俳人の関する歴史的研究を発表。一時信仰生活に入ったが、昭和十一年一高の教師となり俳諧史を講じた。大正一五年日本精神研究の団体である瑞穂会を創設した。

津田青楓 つだせいふう

一八八〇〜一九七八

明治・大正・昭和期の画家。関西美術院で浅井忠らに洋画を学ぶ。明治四〇年に渡仏、ジャン・ポール・ローランズに師事。帰国後、二科会創立に参加、雑誌「白樺」にも関係する。夏目漱石やその門下生、また河上肇と親しくするなど広い交友をもつ。とくに河上肇に影響をうけて社会主義思想に関心を寄せる。昭和六年「ブルジョワ議会と民衆の生活」を描くなど、社会諷刺の画家となる。のちに油絵をやめ、日本画を描くかわら随筆も多い。

生田長江 いくたちょうこう

一八八二〜一九三六

明治・大正期の文芸評論家・翻訳家。明治三九年「小栗風葉論」を発表、評論

家として認められ、以降つぎつぎと作家論を発表。大正三年森田草平と「反響」を発売し、社会問題に対しても発言した。「ニイチエ全集」など翻訳も多い。

森田草平 もりたそうへい

一八八一〜一九四九

明治・大正・昭和期の小説家。夏目漱石の門下。明治四二年平塚らいてうとの恋愛・心中未遂事件を小説にした「煤煙」を発表し話題をよんだ。昭和期には「吉良家の人々」などの歴史小説を多く書いたほか、漱石研究をまとめ「夏目漱石」「続夏目漱石」を出版。戦後日本共産党に入党し話題となった。

「日本人名辞典」三省堂、「日本人名大辞典」講談社より



お知らせ

聞香教室

初心者方を対象に、日本古来の芸道である香道を分かりやすく解説します。また、実際に聞香を体験することができま

す。

▽日時 平成十七年九月十日(土) 午後二時〜三時三〇分

▽場所 無我苑 研修道場

▽講師 志野流香道若宗匠 蜂谷宗實氏(予定)

▽申込み 八月十九日(金)午前十時から受付

講料(千円)を添えて無我苑へ直接お申込みください。

本の情報

●平凡社

別冊太陽一三四号

梅原猛の世界

神と仏のものがたり

構成／西川照子

編集後記

花しょうぶ

今年も五月下旬から六月中旬にかけて油ヶ淵湖畔にて碧南市観光協会主催の「花しょうぶまつり」が開催されました。油ヶ淵遊園地から応仁寺境内にかけてはハナショウブが咲き誇り、この時期の無我苑は年間を通して一番の人の出入りとなり、とても賑やかです。▽ところで、ご存知の方も多いと思いますが、ハナショウブは「碧南市の花」として定められています。昭和四七年に、緑いっばい、花いっばいに包まれた美しいまちづくりを進めるために、「市の木」とともに「市の花」を制定することになり、それぞれ四種の候補の中から市民投票を行った結果、郷土碧南のシンボルとして、市の木にはカシ、市の花にはハナショウブが制定されました。▽ハナショウブの花ことばは優雅。優雅は無我苑を表すことばの一つでもあると思います。同時に、この周辺の優雅な空間を大切にしていきたいと考えています。

(無我苑 杉浦)

